

# 土井13号墳発掘調査報告書

昭和54年3月

島根県・八雲村教育委員会

## 例　　言

1. 本書は昭和54年2月、島根県八束郡八雲村字土井にある土井13号墳の発掘調査報告である。

2. 発掘調査は八雲村教育委員会が主体となって行った。

### 3. 調査組織

教　育　長　　金乗達郎

教　育　次　長　　石倉　輝

主　任　主　事　　三島操子

社会教育主事　　三好　淳

#### 調査員

八雲村文化財審議委員長　　石倉諒一

松江市立女子高等学校教諭　　東森市良

調査補助員　　平林彰裕、内田律雄、柳浦俊一

4. 調査協力　　渡辺貞幸、原田律夫、松本岩雄、宮本徳昭、野津順子

5. 編集は、石倉、東森、内田、柳浦の四者で行い、文責は日次と文末に示した。

## 目　　次

I.	調査にいたるいきさつ	(東森市良)	2
II.	位置と環境	(東森市良)	3
III.	墳丘	(内田律雄)	5
IV.	遺物	(柳浦俊一)	9
V.	まとめ	(内田律雄)	11
VII.	写真図版		

## I. 調査にいたるいきさつ

本古墳が発掘調査の対象となったのは、宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業の着手とともに土砂の採取場としてあげられたことにはじまる。

もともと本古墳の確認は昭和52年度の八雲村埋蔵文化財悉告調査の折であり、その際筆者らは増福寺裏の丘陵に位置する多数の古墳のうち寺院の南側のものを増福寺古墳群（18基）、北側のものを増福寺裏山古墳群（8基）、北東へのびる丘陵上のものを土井古墳群（12基）とした。その後の分布調査で増福寺古墳群も数を増し、土井古墳群も南東側低地に1基（土井13号墳）を確認するにいたった。（「八雲村の遺跡」）参照。

事業主体である松江農林事務所（耕地第二課）から八雲村教育委員会に協議があったのは、昭和53年3月1日で、協議文は土地改良の必要性をのべたあとで、「昨年度の島根県教育委員会文化課の概略調査によれば、古墳が埋蔵されていることが明らかとなっています。しかし本事業を進めるにあたり、その地区にある古墳を止むなく必要最少限度に撤去せざるを得ない状況でありますので、詳細な分布調査に御協力をお願いし、その地区的古墳の取り扱いについての回答をお願いします。尚別途来年度文化財保護法第57条の3に基づく協議をします。」としている。これにともなって村産業課長から村教育委員会文化財係あての添書があり「分布調査の協力については古墳位置を改めて確認したいので再調査をし、現地に位置を表示して下さい。それにより精密な測量をするとのことです。これについては、なるべく早く出来れば今月の10日までにお願いしたいとのことです。」とある。これを受けて八雲村文化財保護審議会は3月12日に分布調査を行ない、その後数回の会合をもって「現状のまま保存すべし」という答申を行った。これに関して村教育委員会は現状保存という結論を出したが7月1日には、村教育委員と文化財保護審議委員を対象として県耕地課より直接事業について説明し再度審議したい旨が伝えられた。このように再三、再四にわたる事情説明及び地元耕作者の熱心な要望もあって最終的には村教育委員会の判断により「採土もいたしかたなし」という結論が出され保険審議会に了解を求めた。

一方村教育委員会は農林事務所に対して採土計画の変更を求め、その結果新しく確認されたものを含めて7基の古墳を調査することになり、それを3次に分けて実施するよう計画した。

その第1次のものが本古墳（土井13号古墳）の調査で、以下第2次（昭和55年度）4基、第3次（昭和56年度）2基が予定されている。（東森 市良）

## II. 位置と環境

土井13号墳は八東郡八雲村東岩坂に位置し、増福寺の裏の丘陵に群在する古墳群のうちの一基である。この古墳群は40基以上の古墳から成り、尾根によって3つの群に分かれ、増福寺古墳群、増福寺裏山古墳群、土井古墳群とされるが、外見上は円墳が多いように見受けられるものの、調査によって明らかになった本古墳のごく方墳も少くないようである。

八雲村最大の水田地帯である戸波平野の周囲には数多くの古墳が分布し、この平野の東端の丘陵支丘の水田に近いところに本古墳は位置する。平野の北側から古墳の分布をみると、松江市との境界に八雲西百塚古墳群があり、これは50基以上的小方墳、円墳から構成される。かつて行政上の区分がなかった時期には松江市の風土記の丘地域内に在する西百塚古墳群と同一の群をなしていたと考えられる。これと相対する雨乞山から派生した丘陵に大谷古墳があり、標高70mのかなり険しい尾根斜面に位置し、日吉地区が一望できる。古墳は丘陵斜面をカットして作られ径8.5m、高さ1.0mの円墳で、横穴式石室が開口しているが、土砂の混入が著しく、石室内部については明らかでない。昭和44年の分布調査時に子持壺の子壺が採集されている。また相対する意宇川西岸の日吉丘陵上には2基の古墳からなる岩海古墳群があり、1号墳は方墳で1辺9.0m高さ2.0m、2号墳は径7.0m、高さ1.0mの円墳である。これをさらに南に進むと意宇川の屈折点の北丘陵上に勝負谷古墳群があり1号墳(方墳)、2~4号墳(円墳)が東にのびる尾根の支脈上に分布している。このうち1号墳は昭和48年開発事業にともなって筆者らが調査したが、墳丘は平面ではやや隅丸の方形をなし10.0×11.0mをはかる。主体部は3個の円筒埴輪を墓壙上に置く木棺直葬で、埴輪の下にさらに置石があり、長方形の墓壙は長さ1.5m、幅0.5~0.6m、深さ0.32mある。副葬品は認められないが、墳丘の形態、構成状況、祭祀に用いられたと思われる土師器(高环)から古墳時代中期のものと判断される。

また雨乞山南麓には八雲村最大の石室を持つ雨乞山古墳(図1)がある。この地は八雲村と東出雲を結ぶ交通の要地である。墳丘は周囲を削られているが方墳と考えられ、1辺10.0m、高さ2.5mをはかる。主体部の横穴式石室は、出雲地方に多い石棺式石室で、前室の蓋石は失われているが、1.45mの両側石を残し、玄室は1枚の切石を用いており、長さ1.65m、幅2.15mの長方形で平入りの家形をなしている。床面は前室、玄室ともに1枚石で構成している。遺物は石室が古くから開口していたので不明である。しかし、この古墳は八雲村第一のもので、交通の要地に位置していることから、意宇平野との関係が注目される。こ

の雨乞山古墳の南方の道路をはさんだ丘腹に原ノ前横穴があつたが道路拡幅工事で発見され筆者が調査した横穴には丘陵の尾根に近く南西に開口し工事により北側壁が削られた。構造は平面長方形丸天井形のくずれたものである。羨道から玄室までの長さ2.3m、玄室の長さ1.4m、幅2.5mをはかる。玄室内部からは、奥壁北側、南側壁にまとめて遺物が検出された。種別では須恵器（蓋杯4、壺4、提瓶1、横瓶1）、鉄器（鎌、刀子）である。須恵器よりすると古墳時代後期（須恵器編年Ⅲ期）にあたる。

なお、増福寺裏の古墳群の位置する丘陵とつながる小谷をはさんで南方に四分市古墳群がある。確認できる横穴だけでも24穴を数え、上面尾根部に6基の古墳が存在する。古墳は一辺9m、高さ1mの1号墳、2~6号墳も7.5~6m、高さ1~0.5mの方墳である。横穴は北斜面に2穴、南斜面に22穴を数え、南斜面のものは3段に構築されている。この横穴群は八雲村最多のもので、プランはおおむね平面方形、丸天井形をなす。

このように本古墳は八雲村で最も古墳密度の高いところにあって、増福寺一帯の古墳群の築造年代を知る上でも貴重なものである。

(東森 市良)



図1 雨乞山古墳石室正面

### III. 墳丘

古墳の測量、及び発掘によって得られた土井13号墳は一辺8.5m、高さは北側で約1m、南側で0.8mを測る規模の方墳であった。測量図は、標高を用い20cmセンターで作成した（図2、図3）。墳丘の北側が方墳としてはいびつな感を与えるのは、墳裾が自然地形によって制約されたためと考えられる。

墳丘南側は尾根を切断し、幅約2mの溝（切削溝）をつくっている。東と西は丘陵を削り墳裾と平坦をつくり出している。その平坦面の幅は、西側では1mに溝がないが、東側は約2.5mと広い。切削溝の中央部の深さは0.4mほどで、左右（東西）にいくにつれ、しだいに低くなり、墳丘の東南、西南コーナーより、それぞれ、東と西の平坦面へとつながっている（図3）。墳頂部は一辺約5mの平坦を呈している。盛土は墳頂部で、旧表土の上に約40cmの厚さがある。かつて古墳築造以前にこの丘陵全体を覆っていた旧表土は、この古墳の中央部付近で途絶え、墳丘の南側にはみられない（図4、図5）。このことは、古墳を築く時に、墳丘の周辺ばかりでなく、もとより高かったであろう丘陵の南側をも削平して、北側へ盛土、整地したことを示している。後述する縄文時代晚期の土器片と石器は盛土の中から発見したものである。墳丘斜面は、ほぼ30°～40°の角度をもって築かれている。尚、墳輪や葺石は認められなかった。

主体部は、発掘調査の結果、本古墳を最も特徴づけるありかたをしていることが判明した。

一つは墓壙の方向である。墓壙は墳丘の中央部に、頭部を北東に向け、古墳の対角線上に穿たれていた。規模は全長4.1m、頭部での幅1.2m、足部での幅0.9m、中央部での深さは遺構検出面より測って約0.5mほどで、それは旧表土下約0.2mに達していた。墓壙床面はほぼ水平である。

もう一つは、墓壙と同レベルで検出された木棺の痕跡である。それは、全長3.1m、頭部での幅約0.5m、足部での幅約0.4m、中央部での深さは約0.2mを測る狭長なものである。足部は明確なコの字状をしているのに対して、頭部は円く曲線を描き、幅もやや広がり、断面はゆるい純角をもってたち上り、全体的には狭長な舟形を呈している。床はほぼ水平である。注目されるのは、木棺の痕跡から、木棺が墓壙の底に接して据置かれたのではなく、一度穿った墓壙の中に土をつめ、底より約0.25mもうかされた状態で安置されていたことになることである。

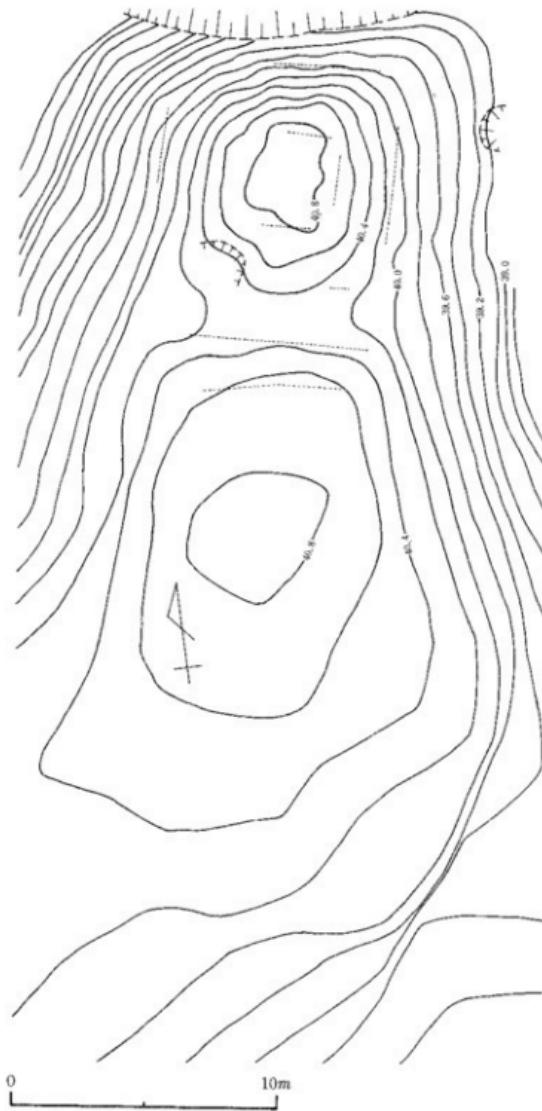


図2 土井13号墳墳丘測量図(1)

また、墳丘の西南角墳壙（切削溝内）で、土師器碗3個体を検出した（図3）。本古墳に關係すると考えられる遺物はこれのみである。出土した遺物の位置は墳丘の対角線上、すなわち、墓壙足部の延長線上にもあたることは、この古墳の祭祀を考える上に興味深い事実である。それは、切削溝が単に墓域を画したり、墳丘築成上必要であることのみならず、墳墓祭祀の場として機能していたことを示すものであろう。

切削溝南側平坦部からは、径0.35m、深さ約0.2mの時期、性格不明の小ピットを一穴検出したのみであった。遺物は表土より須恵器、近世以降の陶磁器片が出土した。この内、染付については別に報告した。<sup>註1</sup>

以上のような、発掘調査の結果から、古墳の築成法を推定すると次の如くである。

- ① 最初に尾根の先端部を水平に削り、あわせて南北側に切削溝を掘り、東と西

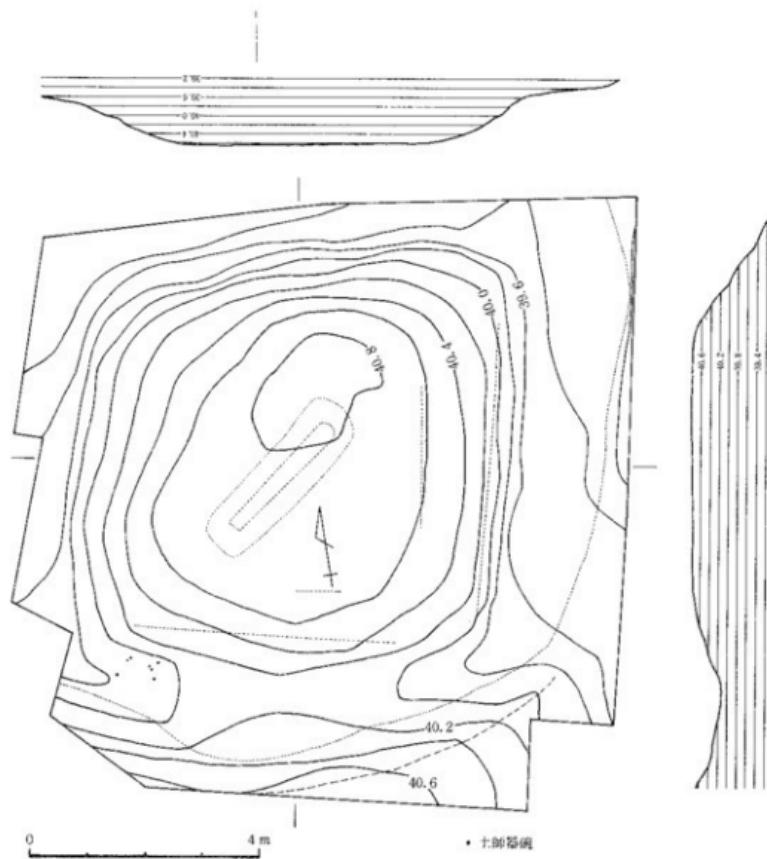


図3 土井13号墳墳丘測量図(2) 主体部検出時

は墳壠を削り平坦面をつくり、ほぼ方形に削り出す。

② こうしてできた上を、尾根の先端（北側）の自然に低く傾斜しているところに盛り、墳丘上面が水平に、全体としては方台状になるよう形を整える。

③ 墳丘中央部に、墓壙をこの古墳の対角線上に位置するよう、頭部を北東に向け穿つ。図3はこの時の状態である。

④ 次に、この墓壙の中に土を入れながら木棺を安置し、木棺のまわりにも土をつめていく。

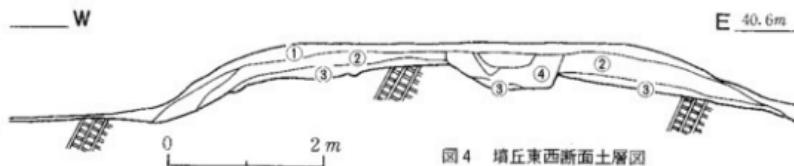


図4 墳丘東西断面土層図

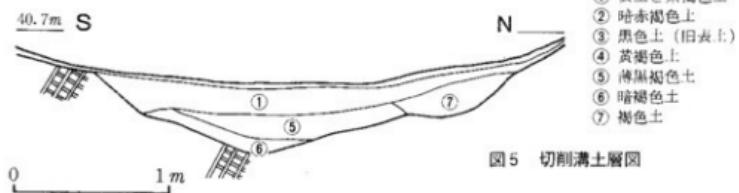


図5 切削溝土層図

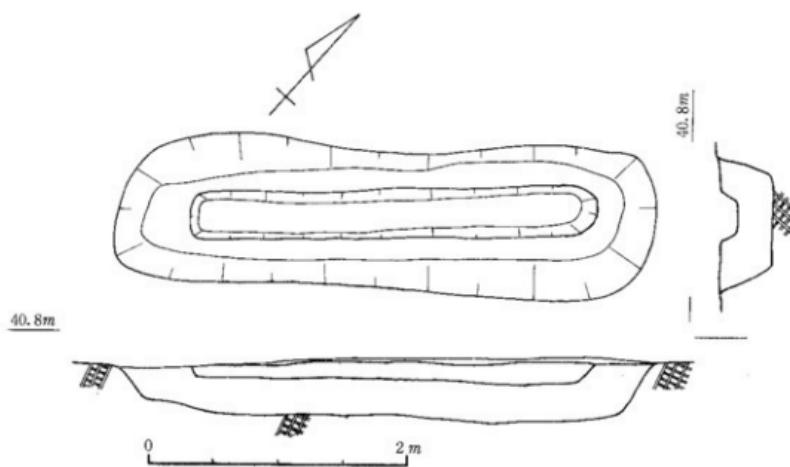


図6 土井13号墳主体部実測図

⑤ 木棺安置後、さらに盛土をして、方墳として形を整える。

⑥ 最後に、切削溝内で、土師器碗を使用した墳墓祭祀を行なう。

註1. 柳浦俊一、内田律雄 速報「土井十三号墳の発掘」『季刊文化財』第35号 昭和

54年3月

(内田 律雄)

## IV. 遺物

主体部から遺物は出土しなかったが、切削溝内から土師器坏形土器が3個体出土した。これらは墳丘と切削溝との境の原墳丘面直上からまとまった状態で出土しており(図3)、この古墳の造築時に近いものと考えられる。

図7-1・2はともに底部は丸く体部は内湾しながら伸び口縁部に至る。口縁端部近くにはわずかに段がつく。1は口径12.7cm、高4.8cm、2は口径14.3cm、高4.6cmを測るやや厚手の上器である。両者とも内面には放射状の暗文が施され、外面には焼成後に赤色顔料を塗彩した痕跡がみられる。外面の調整は、口縁部から体部にかけてはヨコナデ調整、体部下半から底部にかけては手持ちによる不整方向のヘラ削り調整が施される。胎土は緻密で精選されており、わずかに砂粒を含む程度である。やや軟質であるが、焼成は良好で赤褐色を呈する。

同図3は前二者と比較して調整が甘いため風化が進んでおり、詳細な観察はできない。復元口径14.9cm、残存高4.4cmを測る。底部は丸底で、体部は内湾しながら伸び、口縁部は段がつかず丸く単純である。外面はヨコナデ調整を施した後に体部下半から底部にかけてヘラ削り調整が施される。内面には暗文状のヘラ磨きはみられず、ヨコナデ調整が施されている。胎土は非常に粗く、砂粒を多く含み、焼成は不良である。

このような坏形土器は、近年出土例が増加したとはいえ、県内では類例が少ないもので、編年的位置は定かではない。最近の発掘では鳥取県米子市青木遺跡<sup>註1</sup>、出雲市天神遺跡<sup>註2</sup>などで出土している。青木遺跡では比較的まとまった資料が出土しており、須恵器出現前後の年代が当てられている。一方出雲市天神遺跡では溝内から第Ⅲ期の須恵器<sup>註3</sup>と供伴して出土している。

以上のようなわずかな資料から推測するとこのような坏形土器は概ね須恵器出現前後から須恵器第Ⅲ期頃のものと考えられる。しかし本古墳出土の土器は天神遺跡例とかなり趣きを異にしており、むしろ青木遺跡例に近い様相を呈している。また須恵器を供伴していないことを考えるなら、この土器は須恵器が普及する以前のものとも想像できる。

### 墳丘盛土内出土遺物

墳丘の盛土内からは、10数片の土器片と少しほど損失した打製石斧が出土したが、図示することができたのは図4、図5の2つにすぎない。

4は口縁部近くに貼付け凸帯文を持つ小片である。胎土は砂粒を非常に多く含み、焼成

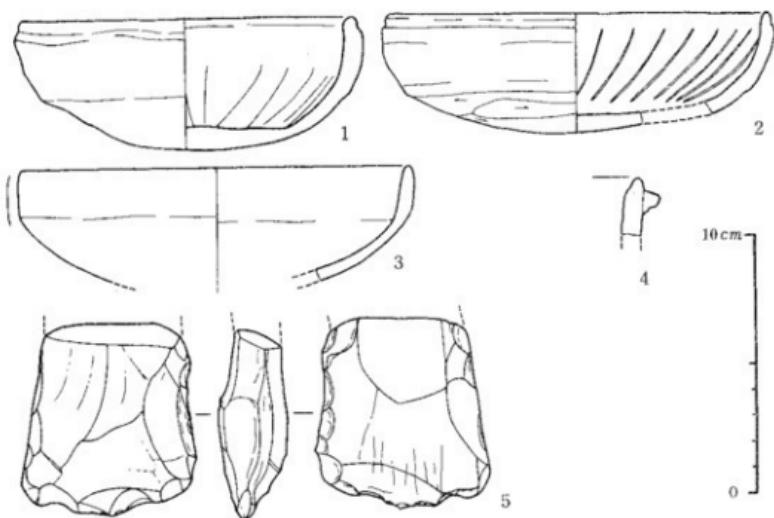


図7 土井13号墳出土遺物実測図

は良好で固く焼きしまっている。この土器は縄文時代晩期後半のものと思われる。<sup>註4</sup>

5は残存長7.3cm、刃部幅5.6cmの打製石斧である。上半部は欠損している。刃部に直交して使用痕と思われる擦痕がみられる。

註1. 青木遺跡調査団『青木遺跡発掘調査報告』Ⅱ 昭和52年 Ⅱは青木Ⅷ期に相当。

2. 島根県教育委員会『天神遺跡』 昭和52年

3. 山本 清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 昭和46年

4. 穴道正年『島根県の縄文土器式集成』Ⅰ 昭和49年

(柳浦 俊一)

## V. まとめ

土井13号墳の発掘調査の概要は以上の如くである。調査によって得られた本古墳の知見をまとめると次の様になる。

- ④ 小規模な方墳であること。
- ⑤ 群集墳を構成する一基であること。
- ⑥ 古墳の対角線上に主体部が位置していること。
- ⑦ 比較的古い時期の古墳であること。

こうした諸特徴は、山本 清氏の「小規模古墳」の概念にあてはまるものである。現在のところあまりこの種の古墳の調査例はないが、今この諸特徴をもつ古墳の類例は、松江市佐草町荒神谷<sup>註1</sup> 7号墳や姫川郡田代町経塚山方墳<sup>註2</sup> 等を上げることができる。

荒神谷7号墳(図8)は、一辺11~13m、高さ約2mの方墳で、対角線上に主体部を置

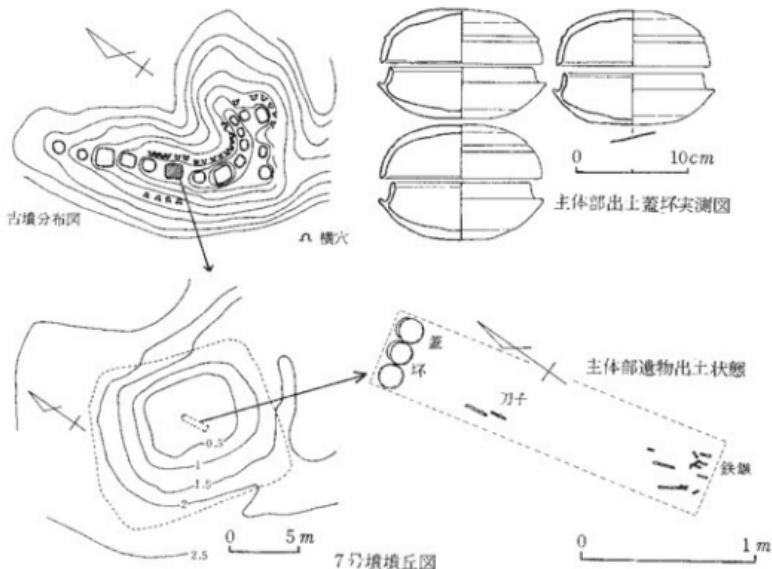


図8 荒神谷、後谷古墳群第7号墳及び出土遺物実測図 (山本 清「古墳」『島根県文化財調査報告書』第五集 昭和43年より拡大トレース・一部改変)



方墳



横穴

0

200m

図9 増福寺古墳群分布図

いている。木棺直葬と考えられ、須恵器蓋坏3セット、刀子、鉄鎌が出土している。須恵器は山陰地方の須恵器編年の第Ⅱ期<sup>註4</sup>のものである。同一丘陵上には同様な方墳が16基、斜面には横穴群があり、荒神谷・後谷古墳群と呼ばれている。この古墳群は方墳から横穴へと墓制の変遷を知ることができる。一方、経塚山方墳は、一辺6m、高さ約1mの方墳で、主体部は一種の礫構造でやはり古墳の対角線上に位置している。主体部からは、滑石製の勾玉6個、棗玉10個と碧玉製管玉10個が出土している。同一丘陵上には、10m内外の古墳が4基ほどあり、斜面には横穴が存在していて、ここでも、方墳から横穴墓への変遷が考えられる。時期は中期末葉までは下らないと考えられている。以上の二例の時期と、土井13号墳の年代観とは矛盾するものではない。

そこで次に、土井13号墳を、古墳群中の一基の方墳として考え、本古墳の存在する丘陵全体をながめてみることにしたい。

図9は土井13号墳と同一丘陵上にある古墳の分布を模式図的にあらわしたものである。便宜上、これらの古墳を三つのグループに区分し、全体を増福寺古墳群と呼ぶことにしたい。さらに、三つのグループを北より土井支群、増福寺裏支群、四歩市支群と名命した。土井支群は13基の方墳から、増福寺裏支群は40基以上の方墳と横穴、四歩市支群は8基の方墳と26穴以上の横穴から成っていて、全体的には、皆一辺10m内外の小規模な方墳と斜面の横穴群から構成された群集形態の古墳群である。これら三つのグループは、それぞれ造営主体が異なると考えられ、この古墳群を構成する三つの集団がいたことを示すものと思われる。この増福寺古墳群も、荒神谷・後谷古墳群や経塚古墳群と同様に、方墳から横穴墓へ墓制の変遷があり、この丘陵が長い期間にわたり墓地として認識されていたことが判る。

山陰地方の群集墳については、かつて、山本 清氏が次のように分類されたことがある。<sup>註5</sup>

- ① 一群中の各古墳が後期に属するもの。（例……益田市鶴の鼻古墳群）
- ② 一群中の各古墳が古式の様相であるもの。（例……西郷町加茂船島古墳群）
- ③ 一群中に両者混在するもの。（例……鹽川郡田儀経塚山古墳群）

そして、特に出雲では丘陵上の小古墳はほとんど③のタイプであることを指摘されている。土井13号墳を含む増福寺古墳群が③のタイプに分類されることは云うまでもない。

山本 清氏の研究成果をふまえながら、出雲地方の群集形態をとる古墳群をもう少し具体的に次のA・B・Cの三つに分類を試みた。

A類……方墳を主流とし、須恵器は山陰第Ⅱ期まで。多くの場合丘陵の斜面に横穴墓をともなう。山本分類の③である。ただし、前期には遡らない。

B類……円墳を主流とし、数基の盟主墳的前方後円墳を含むことが多い。原則として内部主体に横穴式石室を採用。須恵器は山陰第Ⅲ期以降。山本分類の①である。

C類……円墳や前方後円墳を主流とし、古式の古墳から後期までA類やC類に比して造営期間が長く、方墳や横穴墓も含まれる。

A類の例としては、増福寺古墳群、経塚山古墳群、安部谷古墳群（松江市）、百塚山古墳群（松江市～八雲村）、ひのきん山古墳群（松江市）、荒神谷・後谷古墳群（松江市）、金崎古墳群（松江市）等があり、B類には、刈山古墳群（出雲市）、定岡谷古墳群（平田市）、林古墳群（玉湯町）、廻原古墳群（松江市）、伯太川中流域の各古墳群（伯太町）等がある。C類は安来市の椿谷古墳群を上げておきたい。このうち、所謂、群集墳と云えるのは、A類とB類であり、C類は群集墳の概念にあてはまらないと考えられる。

A類とB類の分布をみると互いに隣接することなく、地域を異にしている。そして、どちらかと云えば、A類は松江を中心とする地域に、B類はそれを囲むようなかたちで出雲の東西に多い傾向が窺える。これらの群集墳のありかたは、この地方の古墳時代の社会構造を知るうえに極めて興味深いことであり、土井13号墳もそうしたA類の群集墳を構成する一基としてとらえることができよう。

註1. 山本 清「小規模古墳について」『島根大学論集（人文科学）』13号 昭和39年3月（山本清『山陰古墳文化の研究』昭和46年7月に所収）

2. 山本 清「古墳」『島根県文化財調査報告書』第5集 昭和43年10月

3. 註1に同じ。

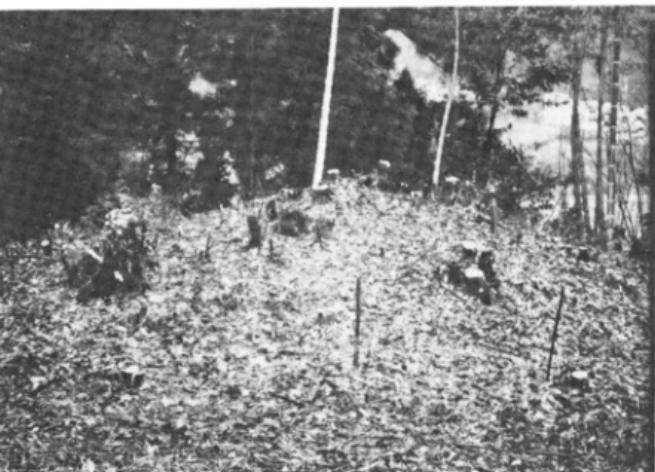
4. 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』昭和35年2月（山本清『山陰古墳文化の研究』昭和46年7月に所収）以下、須恵器の編年はこれに従う。

5. 註1に同じ。

(内田 律雄)



増福寺古墳群を北よりみる



発掘前の土井13号墳



主体部の検出



主体部検出面での墳丘（東より）



主体部  
(頭部より木棺の痕跡を見る)  
(一)



主体部(木棺の痕跡)検出時の墳丘



盛土と墓壙の確認



切削溝のようす



土師器碗の出土状態